

町史のひとこま

(第二十二回)

須恵国民学校の頃 ①

昭和二十年度卒業生に聞く

戦時下の小学校生活の話を開こうと、昭和二十一年三月の卒業生に集ってもらいました。この人たちは、昭和十五年の入学で、日本は三年前の蘆溝橋事件をきっかけに中国と戦争を始めていましたが、翌十六年十二月、今度はアメリカ・イギリスとの戦争を開始したのでした。この人たちの成長と共に戦争は激化の一途をたどりました。集まって下さったのは、男四人、女二人の計六人で、夜のふけるのも忘れて、話していただきました。

入学時は「小学校」でしたが、二年生から「須恵国民学校」と変わりました。一・二年は男女共学で過ごし、三年から別学になりました。一〜三組が男子、

ズックはフジ引きで配給

四〜六組が女子です。おもしろいことに、体格別のクラス編成で、一・四組が虚弱な生徒、二・五組が普通、三・六組が強健な生徒という分け方でした。一・四組には毎日乳酸飲料と肝油の配給があったことを思い出します。四年生からあとは地域別のクラス編成になりました。

戦争が長引くにつれて物資の不足が目立つようになりました。軍需物質ということでしょうか、ゴム製品は特に不足していました。ズックの運動グツが来ましたが、クラスのクジ引きで当たった人だけが買に行くので、当たった人は大喜びでした。たしか三年位の時でしたが、

ゴムの手まりの大きいや小さいのが学校に来て、これもないへん喜んだことがあります。渡すとき先生は、シンガポール陥落でゴムが手に入ったからだ、

と説明されました。

教科書はゆずり物

先生は詰めえりの服を着ておられました。男の子は、えりのある学生服を、色は少し違っていても制服のように着ていました。つぎはぎの服が普通でした。女の子は低学年では着物の子もありましたが、三年生になるともっぱらモンペでした。

一・二年はまだ物資のある時代でした。三年になると物資は

配給になりました。雨ふりは学校に行くのもハダシ、カサは番カサです。佐谷の観音谷から、小石をふみながらハダシで学校に行くのはつらいものでした。(学校は、健康広場の位置にありました)

四・五・六年になると、新しい教科書はなくなりまして。教科書は上の学年からゆずってもらい、下の学年に次々に渡して行くのです。破ることはもちろん、汚すこともできませんでした。

運動場に機銃掃射

五・六年生になると空襲警報がよく出されるようになりまして。学校林で作業中、空襲で松林に逃げこんだことがあります。警報が出ると、一年生が逃げるのが遅いので、上級生は一人ずつ受け持ちの子が決まっています。一年生の教室に急ぎました。連れて帰ってやるためです。雪の中を一年生を背負って逃げまわった記憶があります。

空襲になれてくると、屋根にのぼったり、田んぼの土手にふせて見物するような子もいました。耳と目と鼻をおさえて、みぞの低い所にふせるように言われていました。

ある日、掃除の時間で運動場をはわいているときでした。突然戦闘機があらわれて機銃掃射を受けました。みんなバケツもほうきも捨てて逃げました。裏門の防空壕の中で「お母さんと死にたい」と泣いている子がいきました。(次号に続く)

(町誌編集委員会事務局 石瀧)



紀元2600年(昭和15年)の記念写真(1年2組)。女の子は着物の子やセーラー服がまじり、男の子は全員が丸坊主。はき物はズックか下駄。このあとは戦争の激化で写真をとることもなくなる。(背景の建物は、今の健康会館で、当時は小学校の講堂だった。)